

一般部門 最優秀賞

柿木 星来

『はなれ警女おりん』を読んだ。実はこれまでちゃんと読んだことがなかった。ちゃんと読んだことはないが、なんとなく話と雰囲気は知っている。時代モノの気の毒な恋物語で、自分にはあまり縁がないだろうと思っていた。

ところが、盲目で生きるおりん達の心細さみたいなものに心当たりがある気がして、正直少し驚いた。といっても私は目が見えるし定職もあるので、まったく同じ境遇ではない。

さきほど「ちゃんと読んだことはない」と書いたが、ではちゃんとじゃなければ読んだのかといわれると、私は何を隠そう、まだまだ水上文学の面影残る福井県大飯郡大飯町岡田区で生まれ育ったために、おなじみ阿弥陀堂も、お盆の「阿弥陀の前」も親しみ深い。高校時代は一滴文庫にも図書館代わりによく通わせてもらった。当時から、一滴文庫には水上作品がすべてそろっていたので、受験勉強の合間の手すさび程度には読んだ。

さて、おかげで受験にも成功し、高校卒業後は東京の大学に進学した。なぜかトルコ語を勉強し、今も多少それでご飯を食べている。

話が逸れたが、盲目の心細さは、現地語のわからない外国で過ごすときの気持ちと似ている。普段健常者として生きている自分も、一步、空港に降り立った途端に字が読めず、人の言うことがわからず、口がきけない人間になる。いいようもなく不安だ。「あ、私、障碍者だな」と思う。そしてそう感じているのは自分だけではなくて、周囲からもその扱いを受けているのが肌でわかる。たとえば簡単な注意書き一つとってもそう。読めないものは読めないの、それで屁理屈捏ねるなど怒られても困る。それは、注意書きが現地語だけなのが悪いのだろうか。それとも言葉のできない私が悪いのだろうか。おりんが、見えないものを見たというわけにはいかないと訴える場面があるがあれと同じだ。

同様に、東京の駅のアナウンスも「黄色い線の内側でお待ちください!!」と何度も繰り返すうちに駅員さんの声がだんだん怒りを帯びてくることがよくあるが、

日本語でどんなに怒鳴ったところで外国からの旅行者には通じていない。あるいはその人が日本人だったとしても、視覚に障碍があったら線が黄色いかどうかかわらないかもしれない。それってどっちが悪いのか。良い悪いはわからなくても、どちらの気持ちもとてもよくわかる。

『はなれ警女おりん』は恋物語ではあるが、同時に弱者を描いた物語でもある。水上勉の作品には、そうした弱者をテーマにしたものが多いが、なにぶんもう時代が違う。この「おりん」も、健常者の立場で、しかも当時とはまったく異なる時代を生きる人間の目線で読むと異世界の物語のようだ。しかし、ところ変われば自分も障碍者になり得ると知りながら読むと、たしかに手助けしてくれる人は誰でもありがたいし、たとえその人に悪意があるかもしれないでも頼るほかない。私は助ける側の人間でもあり、助けてもらわないと生きていけない側の人間でもある。

そういえば、「よく弱者の気持ちになりなさい」と教わった。そんなこと言われてもいきなり体が不自由にはなれないと思ったものだが、一步日本の外に出るだけでよかった。そもそも、海外まで行かずとも岡田から東京に行くだけで十分「田舎者」という弱者だったかもしれない。

以上、水上さんへの想いとしては「在所」が同じなおかげで色々な世界を知れた感謝を伝えたかったが、どちらかといえばおりんを通して当たり前のことに気づいたというのが印象深かったので、この機会に書き残してみた。